

令和4年度 第5回 岐阜市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和4年12月23日（金）13時30分～15時30分
- 2 場 所 岐阜市庁舎 6階 6-1 大会議室
- 3 出席者 柴橋市長、水川教育長、川島委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員、加藤委員
- 4 招聘者 (株)教育環境研究所 所長 長澤 悟 氏
- 5 傍聴者 一般2名、報道関係者0名
- 6 次 第 (1) 市長あいさつ
(2) 協議
「これからの学びを創る未来の学校の姿② ～新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方～」
- 7 議 事

(13時30分開会)

○佐藤事務局長

それでは、ただいまから令和4年度第5回岐阜市総合教育会議を開会いたします。

司会を務めさせていただきます教育委員会事務局長の佐藤でございます。よろしくお願いいたします。

本日は、柴橋市長、水川教育長及び川島委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員、加藤委員に御出席をいただいております。

また、会議の招聘者といたしまして、株式会社教育環境研究所所長 長澤 悟 様に御多用の中、御参加を賜っております。

それでは、皆様、よろしくお願いいたします。

これより着座にて失礼いたします。

傍聴者の皆様に申し上げます。傍聴に際しましては、受付で配付いたしました傍聴人の遵守事項に記載した事項の遵守をよろしくお願いいたします。

続きまして、資料の確認をさせていただきます。お手元のタブレットを御覧ください。

次第、席次表、資料1、2及び参考資料1、2を収納し、御準備しております。不足等

ございましたら、挙手をお願いいたします。

それでは、次第に沿いまして会議を進めます。

柴橋市長より御挨拶をいただきます。よろしくお願いいたします。

○柴橋市長

皆様、こんにちは。本日は、第5回岐阜市総合教育会議に御出席いただきありがとうございます。今年も数えること5回目ということになったわけですが、1年間、教育委員の皆様には大変お世話になりました。ありがとうございます。

また、本日は、大変お忙しい中、招聘者として長澤先生にお越しいただきました。長澤先生、ありがとうございます。後ほど、先生より新しい時代の学校施設について、様々な御見解に基づく情報提供をいただけるということで、大変楽しみにしております。よろしくお願いいたします。

学校には、様々な機会に足を運ぶのですが、やはり私の子どもの頃と、また、委員の皆様方の子どもの頃と、あまり変わっていないというのが現状ではないでしょうか。市内の学校や教育施設の多くでは、老朽化が大変進んでおり、築40～50年という施設が多くあります。当時はあのような形の施設が求められましたが、社会が多様化し、子どもたちの教育環境に求められるものも変わってきています。教育DXをはじめとした学び方の変化や、異年齢のコミュニケーションを大切にしていくこと等、新しい教育を存分に行うことができる学校教育施設とはどういうものかということ、これからの学校教育施設の更新という時代を迎えるにあたって、今日はしっかりと学ばせていただき、皆様と共に議論を深めてまいりたいと思っております。

どうぞよろしくお願いいたします。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

次に、次第の2、協議に移ります。

本日のテーマは、「これからの学びを創る未来の学校の姿② ～新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方～」についてです。タブレットの資料1を御覧ください。

まず、事務局より御説明申し上げます。

○塩田教育施設課長

(新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方について説明)

○佐藤事務局長

続きまして、長澤様より御講演を賜りたいと思います。

皆様におかれましては、タブレットの資料2を御覧ください。

それでは、長澤様、よろしく願いいたします。

○株式会社教育環境研究所 長澤所長

御紹介いただきました長澤でございます。本日はよろしく願いいたします。

私の専門は建築であり、設計の前の段階で、人と建築、あるいは社会と建物を結びつけることに主眼を置き、特に学校建築について研究をしております。また、私が学校建築に関する研究を始めた時期は、全国各地で教育施設が変わり始めたころです。教育施設が変わるためには、当事者の参画が不可欠ですから、学校の先生方とは教育施設との関わりについて、そして地域の方々とは地域との関わりについて、提案や話し合いを重ねながら、それぞれの学校、あるいはその地域が求める学校を実現するというを長年やってきました。その間、学校教育も学校施設も求められるものは大きく変化しましたが、それを見続けてこられたことは、研究者として大変幸せな巡り合わせだったと思っております。

本日のテーマであります、「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方」に関して、文部科学省に設置された審議会の調査研究部会において、本年3月に提言が取りまとめられております。私は、その座長を務めさせていただきました。そこでの議論、あるいは、全国の新しい時代を見据えた学校づくりの取組の事例等を御紹介させていただき、岐阜市のこれからの学校施設の在り方について、これから皆様で考えを深めていく際の御参考になればと思っております。よろしく願いいたします。

新しい時代の学校づくりに向けて求められる教育については、既に議論されているものだと思いますので、ざっとご説明いたします。要するに、DX社会で生きる力、あるいは、それを支える力をどう伸ばしていくかが大きな教育的課題とされています。GIGAスクール、インクルーシブ教育、義務教育学校、コミュニティ・スクール、複合化、災害に強い学校施設、地球環境に優しい持続可能な地域づくり、地球環境保全のための課題、木材を活用した学校施設づくり等、様々な課題を受け止めながら、岐阜市の特性を踏まえた、

あるいは、岐阜市の教育として大事にしてきていることを実現していくための施設を考え
ていくことになると思います。変革には、当事者が参画する計画プロセスが非常に大事で
す。ただし、学校建築に関しては、多くの方が一言をお持ちです。私はいつも、「学校
については誰でも玄人」だと言っています。学校については、誰でも話せることが多くあ
ります。ですから、住民参加のまちづくりの最初の手がかりとして、学校づくりというの
はとてもよいテーマだと思います。しかし、皆、同じ体験しかしていませんので、これま
での常識にとらわれた話に終始し、在り方を大きく変えるところまで議論が展開しない、
あるいは、変えようとするブレーキがかかりやすいという点には注意が必要です。です
から、経験を超え、新しい情報を常に仕入れながら議論を進めていくという環境づくりが
大事です。先ほど事務局からも説明がありましたが、ここに示した社会、教育の実現に向
けて学習指導要領が改訂され、令和の日本型学校教育という新たな答申が中央教育審議会
から出されました。そして、その答申が出された月に、学校施設の在り方についての調査
研究協力者会議がスタートしました。この学習指導要領の目標を達成するために、カリキ
ュラム・マネジメント、コミュニティ・スクール、チームとしての学校等、幾つか課題が
同時に示されておりますが、その一つであるカリキュラム・マネジメントにおいては、目
標達成のために、人的・物的資源をいかに効果的、効率的に組織していくかということが
述べられています。物的資源の最たるものは、施設や環境です。つまり、教育を変えてい
くためには、施設や環境も大事であるということが、ここから読み取れるのではないかと
思います。また、先ほど申し上げた調査研究協力者会議には、教育学者、学校関係者、I
C Tの専門家等、多様な専門家の方がいらっしゃいましたが、そこで行われた議論におい
て特筆すべき点は、教育を変えるには、施設が変わらなければならないという認識が非常
に強かったことです。先ほど申し上げましたように、30年程前に教育施設変革の大きな
動きがありましたが、そのときには、まず教育の在り方を定め、それから施設の姿を考え
る、施設というのは教育に対応するものだ、という認識がされていました。しかし、今回
出された報告書のタイトルは、「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方」となっ
ています。要するに、教育を変えることと施設や環境を変えるということを、同時に課題
として捉えていくことが大事だということです。こうした意見が、教育の専門の方からも
非常に強く出されました。GIGAスクール構想についても、中山間地の学校における遠
隔授業が可能になる等、捉え方によっては、ネットワークを生かして地域の中に学校が存
在し続ける可能性を示すものという見方もできます。このように、世界や社会、地域と容

易につながるができる一方で、一人も取り残さない、あるいは学びを止めないということも実現可能です。つまり、これはある意味で、時間、空間、あるいは集団を超えた学びを実現できる可能性があるということです。この環境をどのように生かして教育を展開していくか、ということが求められているのではないのでしょうか。こちら事務局長の説明にありましたが、Schools for the Futureというのが報告書の副題でした。Futureという言葉には、未来思考という思いが込められており、「未来思考」で実空間の価値を捉え直し、学校施設全体を学びの場、あるいは交流の場として捉え直すことを意図したものです。学びを大きな軸として、豊かな生活環境や地域と共に新しい学びを実現していくための施設が必要であり、それをしっかり支える要素として、安全、環境に配慮した施設が必要であるということが述べられています。新しい時代の学びという大々的なテーマのもと、大きな課題が並ぶ中にも、例えば「生活」の中には、トイレの洋式化・乾式化が記載されています。要するに、この背景には、トータルで学校施設というものを捉え直そうという思いがあるのです。学校のトイレというものは、住宅や公共施設のトイレと違い、ある子どもにとっては、学校生活や学校というイメージそのものです。トイレに行きたくないということで、トイレが子どもの健康を損なうことや、トイレでのトラブルが不登校に結びつくこと等があります。トイレは、子ども一人ひとりの視点に立って施設を捉え直すことが大事である、ということの象徴であると言えるかもしれません。

ここからは、ここまで申し上げてきたことについて、具体的にどのような学校づくりが進められているかを御紹介します。これから皆さんが学校施設を考えていく上でのイメージや課題の共有にお役立ていただけたらと思います。

まず、教室についてです。明治の頃の教室は、四間×五間、約7.2m×9mでした。その後、鉄筋コンクリートが一般的になり、8m角の正方形の教室が主流になっていきますが、教室は本当に四角でなければならないのでしょうか。本日、長良小学校を拝見させていただきましたが、教室に先生のコーナーが作られていました。こうしたコーナーや子どもたちが集まるスペース等、教室というのはもっと凸凹があってもいいと思います。そして、そこからさらに自由度の高いスペースにつながっていくということです。子どもたちが集まる場所は、上履きを脱いで上がるようにしておくことも効果的です。上履きを脱ぐだけで、子どもたちの気持ちがとても安定するという話を学校の先生から伺いました。教室そのものを捉え直す際の1つの視点として、ロッカーの在り方があります。教室の後ろ

にロッカーがあるというのは、我々は当たり前だと思っけていますけれども、これは世界でも日本の学校の教室だけです。教室の大きさの見直しは、今回の調査研究協力者会議の大きなテーマの一つでした。30年前の変革期では、教室の大きさには手をつけずに、それでいて、教室の中だけで行うには窮屈な活動に対応できる自由度を持たせるため、オープンスペースを設け、教室と連動して使っていくという発想で、施設がつくられていきました。今回は、その観点も大事にしつつ、さらに教室そのものの在り方まで問い直そうとしました。1人の先生、1つのクラスの居場所である教室というものを、もう少し弾力的にすることで、多様な学習活動に応えられるようにするということです。その中で、教室を学習空間として捉えると、現状では、4枚ある壁のうちの1つがロッカースペースで埋まっています。本来、そこも学習の場になり得ますので、ロッカーの在り方についても議論されました。教室の大きさの見直しを検討した要因の一つは、一人一台端末の導入です。従来の大きさの机では、端末とノート、教科書、筆箱等が机の上に乗り切れません。岐阜市でも年間で1,000台を超える端末の修理が発生しているということもお聞きしました。ここでは、机の奥行きが大事だということで、奥行きを60cmにした例です。これが正解というわけではありませんが、これまで当たり前だと思っていた要素一つひとつについて、新しい状況に対応できるように考え直していくことが、今、求められていると言えるかもしれません。右下の写真は、後ろの壁をロッカーとしないことで、その前で子どもたちが学習を進めている様子です。また、30年前の変革期においては、壁をなくし、オープンにするということが大きなムーブメントでした。しかし、今申し上げたとおり、壁には学習を支え、よい空間をつくるという役割があります。そういう意味で、よい壁をどうつくるか、という視点は重要です。固定的に様々な活動を制約してしまう壁については捉え直す必要がありますが、本当によい壁をどうつくるかということは、大事なテーマです。本日見学させていただいた長良小学校の校舎は、そういうことに対する1つのチャレンジというか、答えの出し方をされていると思いました。次に、教室の中だけに限るのではなく、教室に多目的スペース、あるいはオープンスペースを組み合わせる例をご紹介します。左側の写真のスペースは、教室とつなげられるようになっており、みんなでシェアしていこうというコンセプトでつくられた例です。そこには、様々な机や教材棚等が置かれており、授業の場面ごとに都度机の並べ替えが必要な場合は、場を移すことで多様な学習が展開できるようになりますし、発表の場所として使うこともできます。こうした場を用意することで、様々な活動が行われるようになっていきます。こうした場をつくるた

めには、そのためのスペースを用意する必要がありますが、スペースだけでは学びの場にはなりません。スペースをプレイスにするということが大事であり、そのためには、様々な家具を施設、空間と一緒に用意することが大事です。基本的な道具として、組合せのできる机や大きなテーブル、一人で集中できるような机、一人ひとりの学びを支えるための教材図書が用意しておける可動式の教材棚、書架等が挙げられます。また、それらを配置することで、広いスペースの中に程よいスケールの場をつくり出すことにもなります。建築と家具を、同時にそして総合的に考えることが大事です。学校生活において、例えば学びという視点から見ていくと、あるときには非常に集中して学ぶ場が必要ででしょうし、集中した後は、少しほっとして対話できる場所や時間があることで、次の授業に向かっていきます。同じ学びでも、自由にわいわいすることがある一方で、みんなで真剣に取り組むということもあります。縦軸は学習形態に関するもので、上はグループやみんなで、あるいは協働して学ぶことを、下は個別や一人で学ぶことを表しています。これを副詞とオノマトペで整理すると、みんなで集中することは「じっくりイキイキ」、みんなで自由なアイデアを出し合うことは「ゆったりワイワイ」、一人で次に向けてエネルギーを蓄えることは「ほっこりワクワク」、一人で集中することは「みっちりモクモク」となります。この中の「ほっこり」という言葉は、アクティブラーニングに非常に積極的に取り組んでいる学校で、次の施設環境整備に向けて何が必要だと思うか、というワークショップをした際に、子どもから出てきた言葉です。「一斉授業だと、ちょっと疲れたら、聞いているふりをして寝ていることがあるけど、協働学習だとそうはいかず、本当に集中するから、休み時間ぐらいゆっくりして、また次に向きたい」といった意見がありました。

ここまで教室周りについて整理をしてきました。これからの教育空間、学習空間、学校空間を考えるにあたって、これまではオープンというものがキーワードでした。オープンとは、施設や空間だけでなく、クラスの壁、あるいは教科や時間の壁、学校と地域の壁を開くということで、新しい学校像、教室像を見いだしていこうというものでした。現在では、オープンの歴史やアダプタブルといった概念は大事にしつつ、さらに多様な学習がいつでも自由に展開していけるよう検討することが求められています。こういう場所が必要になったから足し算で新しい施設を付け加えていく、ということでは面積が増えるだけです。施設や空間をできるだけ有効に使いつつ、多様な活動に応え、対応できるような空間を考える必要があります。その際のキーワードとなるのが「コモン」で、基本的な概念を構成するのは、シェアとダイバーシティーです。ある集団に対して多様な空間があり、あ

る場所は特定のクラスの専用の場所として使い、またある場所は特定の教科の専用の場所ということではなく、シェアをしていくという考え方です。場面毎に使われ方が変わっていきながら、全体が連続的な配置になっているということが求められているのであり、「コモン」は、それを求めていく上での1つの手がかりとなる言葉ではないかと思います。デジタル技術の進化によって、知識はもう学校でなくても簡単に得られるようになっており、特にそれは、子どもたちのほうがよくわかっていることかもしれません。では、学校はどのような学びの場なのかということを考えると、学校というのは、そこに自分と違う他者がいて、その他者と一緒に学び、社会性を身につけることができるという非常に大きな特質を有すると同時に、他者がいることで、学び合いもできる場です。ここでは「a i」と書きましたが、一つ目の「合い」というのは、自分とは違う他者との学び合い、助け合い、教え合い、褒め合い等のことで、最近行われた調査で、子どもたちが言われて一番うれしい言葉は「ありがとう」でした。「ありがとう」という言葉は、他者がいて初めて聞ける言葉ですし、「ありがとう」と言われることで、日本の子どもたちが低いとされている自己肯定感や自己高揚感が上がることにつながります。加えて、自分と違う他者との出会いの場としての「会い」、そして、まず真っ先に皆さんが思いつくだらう子どもへの「愛」も含みます。要するに、他者と共に学ぶ場として、学校空間の在り方を考え直していく、ということが1つの手がかりになるのではないかと思います。また、新しい時代の学校を考えるにあたって、新しい呼び名を用意することも大事だと思います。普通教室や音楽教室、理科教室と言った途端に、これまで自分たちが経験した空間の姿がぱっと思い出されてしまうかもしれません。それにとらわれないようにするために、新しい名前を用意して、それを基に自由に考えていくということが有効ではないかと思っております、先ほど述べた「コモン」を用いて、「コモنز」という言葉で表現したらどうかと考えているところです。35人の子どもと1人の先生というクラスルーム単位ではなく、例えば、50人の子どもと2人の先生、あるいは、100人の子どもと3、4人の先生といった集団をベースにし、そのための空間をつくることからスタートするのです。クラス単位の教室があって、そこに多目的スペースを付け加えて学年ユニットをつくるのではなく、大きな集団のための空間を確保し、その中に、例えば30人の集団と1人の先生という関係を大事にする際は、そのための空間を用意できるようにするといったものです。ただし、その場所は、その30人の専用ということではありません。場所は保障されているけれども、その場所は、皆でその時々で使っていくのです。例えば、Aというクラスが理科室で授業

をしている際、その部屋は空になっていますが、隣のBというクラスがもっと自由度の高い学習を展開したい場合は、そのスペースを使ってもよいのではないかという考え方です。まずはこうした投げかけから始め、そこでの課題や可能性を幅広く考え、そこから導き出される姿を計画の目標にしていくというプロセスが大事ではないかと思います。今申し上げた例は、「学年コモンズ」という考え方ですが、1学年に5、6クラスもある場合は、2つのチームにすることが適当です。そういう意味では、「チームコモンズ」とも言えるかもしれません。それから、教科担任制の下で、自由に学習環境をつくることのできる仕組みとして、教科ごとに教室を用意するという考え方がありますが、それについては「教科コモンズ」という考え方ができます。図書館は「ラーニング・コモンズ」、特別教室・専科教室は、STEAM教育という言葉を踏まえて「STEAMコモンズ」といったように、教科毎の部屋ではなく、例えば、物をつくるということであれば、美術室と技術室、家庭科室をうまく連動して使えるようにしていくといった考え方もできます。この場合には、「アートコモンズ」や「創作コモンズ」という言い方もできると思います。音楽や発表といったものも、同じように別の名前でコモンズにできると思います。このように、別の名前をつけて発想を自由にした上で、その先のありたい姿を考えていくことが大事ではないかということです。職員室を「教職員コモンズ」へ、学校空間全体を「スクール・コモンズ」へ、学校自体を「共創コモンズ」へ変えていくことで、それらについても自由な発想が可能になると思います。これは、今申し上げた内容を時系列でイメージ化したものです。昔の学校は、廊下に教室が並ぶ形でしたが、それをオープンというキーワードのもと、教室にオープンスペースを付け加えるという形に変化してきました。これからは、最大100人程度の集団をベースに、必要なサイズの空間を確保し、その中に様々な場所を用意していくという考え方になっていくのではないかということです。クラスルームというものの在り方を問い直し、ある部屋は閉じたスペースで、ある部屋はオープンなスペースで、それをその時々学習に応じて皆で使い分けていくという考え方があるのではないかということです。これは、広島県の中高一貫校の例です。2クラスで一つのユニットとして考えています。QSは閉じられる教室、CSはセミオープンな教室で、LLはいわゆるオープンスペースです。CS、QSはそれぞれのクラスのホームルーム教室に割り当てられていますが、発表で大きな声を出す場合等では、CSをホームルームとするクラスがQSで授業をするといった使い方をしています。こうした使い方をするためには、専用性をなくす必要があります。個人の持ち物を入れるかばん棚があると、そのクラスの場所に

なってしまいますので、HBという持ち物を置くスペースが用意されています。HB以外の教室周りは、学習空間として自由に皆で使い分けて授業をすることができます。これは、実際の様子です。左側が閉じられる教室、中央がセミオープンな教室、右側がオープンスペースで、右上の写真の右奥のほうに見えるのがセミオープンな教室で、正面奥に見えるのがHome Baseです。黒板やホワイトボードなど、教室毎に、あるいは場所毎に性格を変え、学習の内容や性格、目標に応じて使い分けています。ただし、これが全ての正解という訳ではありません。何を指すか、ということを明確にしてつくられた学校施設、学校空間は、従来の教室と違う姿になることがあり得ますし、それを学校毎に見いだしていく、ということが目標になると思います。その際、教育委員会としては、設置者の立場として、各校に共通する目標をしっかりと定めておくことが必要になると思っております。今申し上げた広島県の中高一貫校では、ここに示した「大、国、英、社、数、大」のエリアがそれぞれの学年のスペースになっているのと同時に、教科担任制ですから、それを国語、英語、社会、数学の4教科のスペースとしても性格づけています。また、教科を割り当てない「大」と書いてあるスペースは、教科横断的な活動や発表の場として使うことを意図したものです。このエリア3つがFLAというスペースを介してつながり、さらに中央の図書館で学校全体がつながるとい形になっています。要するに、コモンやユニットを考える際には、それをつなぐ場所というのも併せて考えておくことが大事だということです。これは、教科コモンズの例をイメージ化したものです。従来の中学校は、ホームルームがあって、オープンスペースをつくる場合は、学年毎につくるという構成です。この場合、オープンスペースは、その学年が様々な教科で使う共通の場所という位置づけですから、ある教科がその学習のためにこういう環境を用意したい、こういう机配置をしたいと思ってもできません。結局、このオープンスペースは、教科の特色が出されないままの空間になってしまいます。こうした議論を先生方としている際に、各教科が自由に、狙いに応じて環境をつくれるような仕組みの施設がつかれないか、という話になりました。そこで、教科毎にいくつか教室を用意し、同じ教科でまとめ、そこにオープンスペースを付け加えることで、教科のエリアスペース、教科コモンズになるという構成を考えました。これは、こうした考えを基に計画した中学校の例です。教科毎に自由にできる空間があることで、小学校よりもずっと豊かな教育環境をつくることができました。教科の世界というものが小学校より明確になっているから可能になったのだと思います。一般的に、中学校は、小学校に比べ、教室周りが殺風景な印象を受けることがあると思います。それは、

今申し上げたような理由によります。要するに、本来は使う人が自由にできる空間を用意する、ということが建築計画の目標になるのですが、教科担任制でありながら、小学校と同じようなクラスルームをベースとした施設となっており、空間をうまく使えていないのです。欧米等では、中学校になると、教科の教室を用意するという考え方が一般的になりますので、その辺もまた考え直していく余地があると思います。ただ、こうした教科コモンズの話をする、クラスを中心にした生活指導やクラスへの帰属感といったことについて、いつも心配されます。もちろん、それに関する議論をしっかりと進めていく必要がありますが、実際に今申し上げた教科教室型の学校に勤めている先生方は、逆にその点を明確に意識し、様々な手だてを打っているそうです。クラスづくりをするという観点からいくと、教科教室型では、ある教科教室が、あるクラスのホームルームとしても割り当てられていますので、一定時間、他のクラスの子が授業で使用することになります。その際、そのクラスの子の居場所はどうか、という懸念点が先生方から出されました。こうした心配を踏まえて用意されるようになったのが、教室の隣にあるホームベース、HBと書いてあるスペースです。HBは、他のクラスが自分たちの教室で授業をしているときも、自分たちの居場所として確保されている場所で、ロッカースペースとしてだけでなく、クラスの子どもたちが、皆で思い思いに環境づくりをすることで、それがまたクラスづくりにつながっている様子が見られます。以上、教室周りについて提示をしてみました。

同じように、学校を構成する諸室の空間一つひとつを捉え直してみます。先ほど申し上げたように、音楽室ではなく音楽スタジオや音楽ホール、調理室ではなくキッチンスタジオ、美術室ではなくアトリエといったように、単なる名前の呼び換えだと思われるかもしれませんが、名前を変えることで、皆さんの頭の中が自由に動き出します。ですから、目指す目標に合うよい名前をつくって、それを基にイメージを膨らませていくということも大事ではないかと思います。それから、従来の特別教室での活動は、皆が同じものを一斉に作るというものでしたが、ある課題に対して、一人ひとり違う取組があってもいいのではないのでしょうか。ここでは、Creator SpaceやTinkering Space、Maker Spaceという諸室の例を示しました。従来の特別教室とは違う、主体的に活動を行う場として、わざわざ教室から出かけて行って活動するこうした諸室の場所の性格を捉え直すことも手立ての一つです。例えば、Maker Spaceのような、従来の教科の枠にとらわれない、ものづくりや創造的な活動を行う場所は、近年、中国や韓国の学校では当たり前を整備されています。それから、特別教室はホームルームか

ら出かけていく場所ですので、まず子どもたちを待ち受けるのは教室の前の空間です。この教室の前の空間が大事であるということで、音楽教室の前にホールを設け、美術教室の前にギャラリーを設けるといった空間づくりがされている例もあります。このスライドの右側は同志社中学校ですが、「学校は、博物館である。」という学校全体の大きなキーコンセプトを基に、例えば、理科教室の前の空間には、多様な教材が様々に置かれており、その世界に子どもたちを引き込むような空間づくりがされています。図書館についても、ラーニング・コモンズとして捉え直すことで、それぞれが思い思い好きな場所を選びながら本に触れ合うといったように、読書の間としてより豊かな場所にすることもできますし、学習の間として、発表する場所としてもイメージできるようになるということです。先ほどから、どういう場として捉え直すかを検討するにあたって、名前を言い換えることで、柔軟な発想ができるようになるということを申し上げているわけですが、それはPC教室も同じです。Maker Spaceとして捉え直すことで、資料やプログラムを作るだけでなく、実際にものを作り、動かすような、ものづくりの場所にすることができます。それから、教室周りを自由度の高い、多様な学びが展開できる場にするのと同時に、教室周りでは十分整え切れない、あるいは、面積を用意できない場合に、アクティブラーニングスタジオとして新たな空間を用意し、大画面の投影設備を整える等、新しい学びに対応できる空間をつくることも手立てとしてあるのではないかと思います。ここまで、学校の一部としてコモンズを説明してきましたが、校内に高速大容量通信ネットワークが整備されていることを前提にすれば、学校の中のどのような場所も、学びの間、コモンズになります。例えば、中庭に腰を下ろしてテーブルとして使えるような場所があれば、そこが学びの間になりますし、ホールの階段の幅を広げることで、そこが集まって交流する場になっていきます。そういった発想で捉え直していくと、学校にはまだ様々な可能性があります。特別な部屋を今までの施設に付け加えるということではなく、このように捉え直しをすることで、今ある空間をより魅力的にし、学校空間全体をより効果的に使えるようなアイデアにつながっていくのだと思います。

トイレについてですが、学校を建てる際、建築家には、トイレは居室であるというところからスタートしてください、といつも言っています。建築基準法によると、トイレには窓がなくてもよいのですが、居室であれば、窓は必ずつくります。そこに明るい光が差し、自然換気ができ、気持ちのよい空間があれば、リフレッシュできる場所にもなりますし、他のクラスや他の学年の子どもたちと気持ちよく触れ合う場所にもなります。また、逆に

一人でほっとできる場所にもなる可能性を持っています。

ここまで、子どもの場所についてお話ししてきましたが、先生の居場所を捉え直すことも大事です。ここに示したのは、個人机が島状に配置され、その島の間先生ロッカーを配置した例です。先生の机の上に、うずたかく様々な資料が置かれているのを見たことがあると思いますが、あれは先生方の整理が悪いのではなく、収納が足りないという状況を表しているのです。この例は、机とは別に収納用のスペースを用意したものです。それと同時に、子どもたちに開かれた職員室として、子どもたちと先生方がソファやカウンター、テーブルで相談できるスペースも用意しました。こうしたスペースは、特に中学生ぐらいの子どもたちにはとても大事になります。また、いわゆる大部屋の職員室には、先生同士の情報交換が自然にできるという利点がありますが、より多様な先生同士のコミュニケーションが生まれることを期待して、アドレスフリーにすることや、執務環境をよくするために、机の幅を10～20センチ広くしても、そこまで飛躍的によくなるわけではありません。それよりは、個人の席を用意しておいた上で、共用の大きなテーブルやゆっくりできるようなソファを配置した空間があると、先生方の執務環境やリラックスできる環境が整い、執務能率の向上につながるのではないかと思います。これは、それをダイアグラムで表したものです。今までの職員室に対して、個人席と書いてあるスペースをできるだけ小さくし、自分の席が用意されているというだけでよいのではないかと、という考えのもと作成したものです。そして、それによって生まれた空間にテーブルやソファを置き、共用の場所をつくっています。これはフィンランドの例ですが、大きなソファが置かれています。また、奥のテーブルでは打合せができますし、右側のガラス張りで設備の整ったスタジオ的な空間では、デジタル教材の作成やリモート研修へ参加すること等ができます。ここの学校の先生方は「リビングルーム」と呼んでいましたが、職員室は、そういう捉え方もできます。中央下の写真にケーキが写っていますが、先生方は、この場所でケーキを自由にとって食べ、お茶を飲んでリラックス・リフレッシュして、また子どもの世界に向かっていくのです。

次に、小中一貫教育についてですが、小中一貫教育の場合、子どもたちは、1つの場所に9年間という長期間にわたって通いますので、その中で大きく変化しながら成長します。ですから、同じような学習空間で9年間過ごすのではなく、成長に合わせて学習空間を整えるといった捉え方もあるのではないのでしょうか。1、2年生は、教室周りで様々な活動が展開され、3、4年生になると、特別教室に出かけていくことも多くなります。5～7

年生で教科担任制が入ってくると、一部の授業で教科専門の教室に出かけていくというように、行動が変わっていきます。こうした9年間の変化の中で、子どもたちが成長を感じられるよう、学校をどうデザインするかということは、1つの大きなテーマになると言えます。左側は、1、2年生の教室の写真です。教室内にちょっとしたコーナーを設けた、大きめの教室となっています。右側は、8、9年生の教室の写真です。教科コモンズを意識した造りとなっています。また、こうした学校では、職員室を一体感を持って教材作りができる機能や、コミュニケーションが生まれるラウンジ的な機能等、小中の先生方が一緒に使い、多様なコミュニケーションが生まれるような場所として、どう捉え直すかを考えることも大事です。加えて、図書館は、交流の場所としてとても大事な役割を担うことができます。総じて、こうした小中一貫教育を行う学校では、小学校と中学校のエリア、そして交流の場所をどう用意していくかが課題になります。まずは、こうしたことを課題として意識することで、そこから様々なアイデアが出し合えるのではないかと思います。その他、様々な活動における自然な交流を促すため、例えば、右側下の写真では、登下校の際のアプローチが設けられておりますし、右側中央の写真では、登校してきた子どもたちが一旦広場に入ってきて、そこからそれぞれの昇降口に行くような設計がされています。交流の場所と、それぞれの生活圏をどうつくっていくか、ということも課題でしょう。また、9年間の中で、地域、保護者とも様々な関係ができていくでしょうから、地域ぐるみの教育を進める、センター的な場所を学校の中に用意してもよいでしょう。

ここまでは学校の中の話でしたが、ここからは、学校と地域との関わりについて話したいと思います。本日見学させていただいた学校も含め、岐阜市では既に取り組みされていることかもしれませんが、ここに示した近江八幡市の学校は、地域づくり、コミュニティづくりの単位を設定して、その中心に小学校を位置づけて設計されました。小学校とコミュニティセンター、児童クラブを複合化し、それを地域コミュニティの中心としています。地域によっては、そこに消防団施設が併設されているところもあります。こちらの例は、学校の体育館やホール、図書館を地域の方たちが使え、また、複合したコミュニティセンターの施設を子どもたちも使うことができるようにしています。これによって子どもたちへの教育効果は高まりますし、地域の人にとっては、体育館やホール、図書館もあるコミュニティセンターであれば、活動の幅も広がります。このように、学校にとっても地域にとってもよい、ウィン・ウィンの施設づくりというものを、複合化を1つのキーにしなが

ら、地域毎にどのような姿を描いていけるかということだと思います。こちらは小さな町の例で、町民の思いは、伝統芸能を皆で楽しむことや、地域の人が教え、それを演ずることができるホールのようなものが欲しいというものでした。また、町民のための図書館が欲しいという課題、懸案もありました。しかし、それらを単独でつくることは、財政的にとても難しい状況でした。そこで、中学校の建設に合わせ、複合化することで実現させた例です。学校にホールや図書館があり、地域の人たちも使えるようになっています。このような、学校と他の施設を複合化する例は、都市部でもみられます。それから、防災という観点で、学校が地域を支えるような施設づくりが行われた例もあります。また、これは震災復興の例ですが、地域の人たちがいつでも足を運べ、そこで過ごせるような学校づくりも行われています。こちらは、学校をつくる段階で築いた住民との関係を、今度は完成した施設を守り育てる力にしていこうという取組をした例です。学校の中にそういった人たちがいつでも集まれる地域ホームベースというものをつくり、先生方と共に子どもたちを育てています。

続いてお話するのは、木材の活用についてです。豊かな山を持っている地域として、岐阜では木材の活用をぜひ積極的に進めたいと思います。木の価値は、木造でなければ発揮されないというわけではなくて、人は見た目が9割とも言われますが、木も見た目が9割でして、木の効果は表面的な仕上げに使うだけで発揮されます。右側の写真を見ていただくと、板塀に絵が貼られているのが分かると思いますが、画鋏は全て目地に打たれています。これは、子どもたちから子どもたちへ代々受け継がれているもので、完成から約10年後、校長先生と一緒に校舎を回った際にその話をしましたら、それは知りませんでした、とおっしゃっていました。これは、子ども同士が伝えながら一緒に育てているということで、学校という場ならではですし、木の持つ教育力の成すところということが言えると思います。既存校舎の改修においても、木をうまく使うことで、新築の校舎と全く同じ喜びを与えることができます。これもまた、木が持っている力だと言えます。

最後に、東日本大震災からの復興の例を紹介します。こちらは、子どもたちに戻ってきてもらうために、学校らしくない学校を教育面でも施設面でもつくろうとした例です。こちらは、伝統的な町並みが失われた地域の学校で、町並みの再現、あるいは、地域の伝統的な大工技術を生かした木造校舎の建設が進められている例です。学校の建設が皆の大きな喜びを生み、その学校が地域の人たちの集まりの場所になっていきます。この学校の校区の復興住宅地には、住宅以外何もなく、皆で集まる場所や活動する場所がありませんで

した。ですから、学校を計画する際に、そういう場所として学校を造っていかうということで、地域の伝統芸能を教える場所として、ホールをつくりました。完成後は、実際に地域の方が伝統的な太鼓を教えに来ますし、皆で造った学校として、大掃除の際は、保護者も参加して、子どもたちと一緒に掃除をしています。皆が一緒になって夢を語り、育むということも、学校建築ならではの力だと言えます。これは、津波で被害を受けた陸前高田市の市街地から学校を見上げたところです。中央にあるのが今ご説明したホールと校舎で、足元に奇跡の一本松があります。昼間だけでなく、夜間も地域の人たちの活動する光が市街地から見えますので、地域の、そして復興の到来を告げるシンボルになっています。

こうしたことを考えますと、「学校は教育施設ではない、学校は学校である」と私は思います。この、「学校は学校である」ということの意味を、地域毎にどう捉え、地域の皆さんの力で実現していくか、ということが新しい時代の学びを実現する学校をつくっていく上で大事なことではないかと思っております。

これからの岐阜市の子どもたちの夢を育てる場として、学校が豊かに整備されていくことを願っております。ありがとうございました。

○佐藤事務局長

長澤様、ありがとうございました。

長澤様におかれましては、この後も引き続き最後まで御参加いただきます。よろしくお願いたします。

これより、事務局の説明及び長澤様の御講演を踏まえまして、皆様から本日のテーマである、これからの学びを創る未来の学校の姿につきまして、新しい時代の学びに適した学習空間、人々が集う地域の拠点としての学校という観点から御意見を頂戴したく存じます。

では、教育委員の皆様、加藤委員、川島委員、武藤委員、横山委員、伊藤委員の順にお願いたします。

それでは、加藤委員、いかがでしょうか。

○加藤委員

長澤先生、本日は、貴重なお話しをありがとうございました。

学校は、子どもたちが1日の3分の1を過ごす場所であって、住環境という観点から学校を見ていくことは、とても大事であると常々思っています。そこがいかにか安全で、安心

できる場所であると感じられるかということが全ての根幹にあるという点は、まさにそのとおりだと思っています。

私は、今年5月に診療所を開設しましたが、木材と漆喰をふんだんに使った建物をリフォームして使っています。これまでは、いわゆるコンクリート造の建物で診察していましたが、ここに来ると、子どもが話をするのです。場面緘黙症により、今まで病院でしゃべることができなかった子が、声を出すようになりました。もちろん、診療所自体が小規模で、医師である私しかいないという安心感もあるでしょうが、やはり木に包まれた感じ、あるいは木の温かさというものが、子どもの心を開く一助になっていることは間違いありません。環境の持つ力は非常に大きいということをこの半年ほどで目の当たりにし、学校の環境にもぜひ反映していただきたいと思います。また、このような観点から学校の建物を考えていくことは、非常に大事なことだと思っています。

最近建てられた岐阜市の学校もそうですが、オープンであることを大事にした建物は、音の漏れも大きいものです。防音がしっかりできていないと、音に敏感な小さい子は、どうしても気が散ってしまいます。長澤先生がおっしゃったように、防音設備はとても大事なものですので、この点も学校の建物を考えていく上で重要な観点ではないかと思います。

また、多様性の受容もやはり大事な観点だと思っています。明るくて広いというイメージが学校にはあると思いますが、実は、暗くて狭い場所も必要です。なぜかというと、特別な支援を要する子どもたちにとっては、こうした場所が必要だからです。文部科学省の調査で、特別な支援を要する子どもの数は、小学校で8.8%に上ることが分かりました。実際の肌感覚では、もう少し多いように感じています。こうした子たちが学校で一人になりたい時に、学校には一人になれる場所、隠れられる場所がありません。そういう意味では、長澤先生のお話しにあったように、ほっこりできる場所や、落ち込んだ気持ちを立て直す場所等、多様な場所があるべきだと思います。こうした居場所といえる場がないと、学校にいられないということが起きてしまいます。不登校を減らすという意味でも、子どもたちに多様な場所を提供し、居場所を決めつけられないということも大事だと思っています。

そして、人々が集う地域の拠点としての学校ということでは、学校には、アートや音楽、料理等ができる専門的な空間があります。以前から、それを子どもたちだけで使うのはもったいないと思っていました。地域の方等と一緒に音楽を奏でることや、キッチンを使って料理をすること、絵を描くこと等ができると思います。

また、長澤先生が多様なスペースの事例を紹介してくださいました。多様な学習形態を

想定した施設であれば、1時間の授業のうちに場面に合わせた形態にすることができます。1時間座ってられない子や集中しにくい子にとっては、とても有効なのではないかと思いました。

最後になりますが、木質化は新築でなくてもできるということを本日知ることができました。改修等でも木質化ができるのであれば、ぜひ取り入れていただいて、将来的な改築や建て替えに生かしていけるとよいと感じました。

以上です。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、川島委員、お願いいたします。

○川島委員

よろしくお願いをします。

長澤先生のお話をお聴きして、岐阜市としてどのような教育をしたいのか、あるいはどのような課題があるのか、といった点を整理し、明確にした上で、それを施設や設備でどのように実現し、どのように解決していくか、ということがポイントであると理解をしました。お話の中で印象的だったのが、広島県立広島叡智学園の事例です。ここは中高一貫校で、国際バカロレアの認定校です。そこで実践されるカリキュラムを実現するための施設、設備が整っているはずですが、もちろん、それだけを目的にしているわけではないと思いますが、実践したい教育と、施設、設備は表裏一体であるという意味からすれば、教育施設に向き合うためには、岐阜市がどのような教育をしたいか、ということがベースにしっかりとなければなりません。また、長澤先生のお話の中で、施設毎に異なるバックグラウンドがあって、それによって対応方法が変わってくるというものがありました。改修するものや廃止するもの、建て替えるもの等、それぞれの地域や施設によって、その処方箋は異なります。当然、施設毎に異なる処方箋を持って、基本構想から練っていかねばなりません。基本構想をつくるにあたって、やはりベースになる、何をしたいのかという根本的なところがはっきりしていないと、軸がぶれ、思うような効果があげられないということになってしまいます。ですから、学校施設を考える上で、まずは何がしたいのか、あるいは何をやっていくのかを固めるべきだと思います。地域や施設によって事情は

異なりますが、目指す方向性は同じ、という点だけは、貫かなければならないところだと思っています。

もう一点、建築関係ですと、理念だけでは何ともならない、費用という問題がどうしても出てきます。必要な経費であれば、優先的に予算を配分せざるを得ませんが、プラスアルファの部分の費用をどこから捻出するか、という議論も併せて行っていないと、理想論で終わってしまいます。もしよろしければ、そういった点について、長澤先生からご示唆いただければと思います。私は、その打開策として、本日の論点の一つであった施設の多用途化があると思います。学校という用途だけに限定した施設を建てるのではなく、同じ地域にある他の施設と複合化することによって、教育以外の予算を教育の建物の中を導入し、一緒に建設していくということなのではないでしょうか。教育予算以外の予算というものを導入することで、教育施設が開発されていくという取組は、大いに研究の余地のある重要なテーマではないかと思っています。

本日は非常に示唆に富んだお話を伺うことができました。ありがとうございました。

○佐藤事務局長

長澤様、いかがでしょうか。

○株式会社教育環境研究所 長澤所長

川島委員のおっしゃるとおりだと思います。

御紹介した事例の中に、公共施設として単独では建てられないので、学校と複合化して建設したというものがありましたが、学校施設だけではなくて、他の公共施設と総合的に考えていく、つまり公共施設マネジメントという観点が必要になります。それによって、まち全体の財源の中で、必要な予算を学校施設の整備に充て、その整備された施設がこれまで公共施設で果たしていた役割をしっかりと担えるようにしていくというのは、大事な考え方だと思います。

公共施設の配置状況や規模、老朽化の度合い等は地域毎に異なりますから、市として理念や課題、目標をしっかりと持った上で、個別の学校の置かれている状況を整理し、学校毎に、あるいは地域毎に答えをつくっていくということになると思います。そういう意味では、今までのような名前のある施設ではなく、地域の皆の思い、あるいは、地域全体のことを考えて計画したらこんな施設になったという、「名前のない施設」をつくるという

ことが、きっと多用途な施設をつくるということなのではないかと思っています。

○佐藤事務局長

ありがとうございます。

それでは、武藤委員、お願いいたします。

○武藤委員

長澤先生、大変貴重なお話をありがとうございました。

長澤先生の資料を事前に拝見し、また本日のお話を伺って、非常にわくわくする内容がたくさん盛り込まれており、とても勉強になるなと思いました。昨今の施設の状況を鑑みますと、老朽化してどうしようという、何となく少し暗いイメージで捉えがちですが、こうした明るい希望が持てるヒントを多くいただけて、非常に有意義なものでした。

私も、予算に関する点はかなり気になっています。柴橋市長は子どもファーストを掲げていらっしゃると思いますので、然るべき予算はしっかりつけていただけるものだとは思いますが、さりとて財源も限られていますので、予算をいかに効率的に活用していくかは非常に重要なポイントです。先ほど長澤先生から、「名前のない施設をつくる」という非常によい言葉をいただきましたが、学校と他の施設を複合化させるといった工夫によって、限られた財源の中で大きな成果を上げることができるのではないかと思います。これは、学校だけの問題に留まりませんが、そういった観点を持って施設づくりを考えることは、非常に大事だと思いました。

それから、当事者の参加が重要だというお話を最初にされていましたが、学校以外の施設と複合化することで、本当に多様な当事者の方に参加していただけるのではないかと思います。岐阜市は全校がコミュニティ・スクールになっており、地域と一緒に学校を運営していく、ということを従前から掲げていますが、こうした地域の方にも、学校というものについて考えていただける機会になると思います。そして、完成した後も、というお話もありましたが、地域の方と一緒にその施設を活用していくことで、コミュニティ・スクールがより実質化していくという側面もあるのではないのでしょうか。このように、学校づくりを通じて、様々な可能性を考えることができるのではないかと思います。

また、今後、改修や場合によっては新築もあると思いますが、本日御紹介いただいた設

備の活用方法や考え方は、今、現実にある学校の設備で利用できるもので応用し、実践してみることも必要だと思います。先日伺った市内の中学校では、既存の机や椅子を用いて、草潤中学校にあるような、子どもが個別に休めるスペースが作ってありました。このように、今あるものを有効活用することで、御紹介いただいた考え方を具現化できる部分もあると思います。そういった取組を各学校で進めていただくとともに、それを横展開していくと面白いと思います。また、そうした経験を蓄積していく中で、新たにこういうものがあつたほうがよい、こういうところに新しいものが欲しい、こういう施設をつくりたいという、それぞれの学校や地域特有の考え方が生まれてくると思います。それを、今後の改修や新たに施設をつくる際に生かすことができるのではないのでしょうか。

本日は、多様なアイデアを提供していただきましたので、これから来る大改修時代に備えて議論を進めてまいりたいと思います。ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、横山委員、いかがでしょうか。

○横山委員

長澤先生、どうもありがとうございました。

先生のお話を伺って、施設というものは、教育と同時並行で考えていくべきものであるということ、それから、トータルでコーディネートすることの必要性を改めて実感いたしました。

もし改修を行う場合や新校舎をつくる場合は、木を使った、温かみを感じられる木造りの学校というものをぜひ進めていきたいと思います。それから、トイレについては、完全洋式化が必要だと思っています。学校以外の様々な施設と比較しても、学校のトイレの洋式化率は低く、土台となる基本的な部分として実現すべきだと思います。また、子ども同士、あるいは地域の方たちと語り合う場、フューチャーセッションができる場といった位置づけの多目的ホールを設けることや、図書館をラーニング・コモンズにすること、教員が一息つける場や子どもと語り合うことができる場を設けること、教員間の関係構築を促し、かつ子どもたちも出入りしやすいような職員室にすることも必要でしょう。他には、保健室の機能を強化するような施設、設備も必要だと思います。また、別の視点として、

学校と公民館などを合築した複合施設を検討すべきだと思います。複合施設にすることで、学校と地域の方がお互いに理解し合え、学校の応援団になっていただけるのではないかと思います。私は、かつて海外の日本人学校に関する仕事をしていたことがあります。日本人学校は世界中にあり、大規模校から小規模校まで様々ですけれども、日本人学校に行けば、たとえ一年中暑い地域でも、日本の四季を感じられる行事が行われており、必ずそこが地域の拠点、ひいては日本というものの拠点、心の拠り所になっていました。これは、日本国内においても同じことだと思います。この点からも、学校というものを複合化し、共有化することで、より一層地域の拠点、心の拠り所として機能していくのではないかと思います。

本日を機に、トータルで学校施設について考えるということに取り組んでまいりたいと思います。どうもありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、伊藤委員、いかがでしょうか。

○伊藤委員

長澤先生、貴重なお話をありがとうございました。

先日、竣工式を迎えたばかりの岐阜県庁にお邪魔させていただき、内部を拝見させていただきました。私は、県民として誇らしい立派な建屋になったことを大変うれしく思いました。規模は全く違いますが、学校も、地元の方にとって誇らしい施設にするという視点も大事ではないかと思いました。その一つの手段として、木を用いるということがあると思います。少し前のことですが、私が経営する旅館のコンセプトを変えた際、廊下に格子を取り付けました。付近の町並みに格子がたくさんありましたので、旅館の中にも取り入れたいと思って取り付けたのですが、お客様から、今まで病院の廊下のようなだったが、すごく雰囲気よくなって、ほっとできるところになったね、とおっしゃっていただきました。木を使うことで、落ち着くという心理的メリットがあると思います。そして、室温や湿度が保たれやすくなるという身体的なメリットもあると思います。新しい岐阜県庁も木をふんだんに用いておりましたし、その材木自体も県産材を使っておられました。材木に限らずですが、外国産のものを使うのではなくて、できるだけ岐阜県や日本のものを使っ

ていけるとよいと思います。また、新しい岐阜県庁では、美濃和紙を使った照明が用いられており、ギャラリーに岐阜提灯や飛騨春慶等も飾ってありました。せっかく学校をリノベーションするのであれば、そうした地域資源を活用することで、学校が地域のシンボルになる可能性もあるのではないかと思います。また、大正13年に建設された司町の旧県庁で使用されていたステンドグラスが移転されていました。そうした古い大切なものを残していくということも、学校を新しくする際にできるのではないかと思います。古いものは、建て替えなどで壊されてしまうことも多いのですが、欄間や蔵の戸等、今では職人さんがいなくて作れなくなってしまったものを地元から頂いて、新しい学校に生かすといったこともしていけるとよいと思います。

また、学校施設を考えていく上で、特別支援教育をどう行っていくかという点は、大きなポイントの一つではないかと思っております。先ほど加藤委員もおっしゃられましたが、昨今、特別な支援を要するお子さんが増えている、という状況があります。特別支援学級に在籍する児童生徒が増え、教室が足りないという学校もあります。支援が必要なお子さんは、今後もますます増えていくと思いますので、市として特別支援学級を増やしていくのか、あるいは、インクルーシブ教育を進めて通級指導教室を増やしていくのか等、どのような方針で対応していくかによって、学校のつくり方は変わってくると思います。個別支援の在り方も考慮に入れて、学校施設を考えていかなければならないと思います。

最後になりますが、長澤先生のお話にでてきたコモンズは、なるほどと思って聴いておりました。コモンズによって会話が生まれ、提案が生まれ、そして協働が生まれていくと思います。私は、子どもたちはもちろんですが、教員にも、今まさに必要なことではないかと思っています。働き方改革が進まないのは、教員の個人事業主化も要因の一つではないでしょうか。学校自体が、個人事業主がたくさん集まった商店街のようになっているところも見受けられます。ハードを変えることによって、一筋縄ではいかないと思っていた働き方改革にも、メスを入れることができることを今回学ばせていただきました。大きな課題の一つである、教員の働き方を改善できるような施設づくりというものも、今後進めていきたいと思っております。

ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、水川教育長、いかがでしょうか。

○水川教育長

長澤先生、ありがとうございました。

とても魅力的なお話ばかりでしたが、最後に出てきた気仙小学校は、縁あって、震災直後の、今学校がある高台にベルトコンベヤーで土を運んでいるときから、何度も訪れて見てきました。今度伺う際に、ぜひ学校を見てこようと思っています。長澤先生が設計をされているということで、すごく感激しています。

「学校は学校である」という最後のフレーズがとても印象的で、このことについて、しっかり考えなければならぬと思っています。長澤先生が御紹介してくださった多くの学校がなぜこれほど魅力的なのかを考えておりましたが、私は2つあると思います。それは、子どもが真に学びの主役になれるのではないか、という期待感と、多様性というものが認められるのではないか、という期待感が感じられることです。

長年教育者としてやってきましたが、学校というものには、脱却すべき3つの視点があると思っています。1点目は、一斉からの脱却です。人類の英知を伝達するという作業は学校の大事な要素ですが、「皆さん分かりましたか」というスタイルが学校ではない、ということ踏まえて教育を進めなければなりません。2点目は、教室至上主義からの脱却です。草潤中学校は、教室を学びの基本としつつ、どこにいても学べる環境となっています。教室だけが学びの場ではない、ということ考えなければなりません。3点目は、収束型からの脱却です。収束させ、インプットして終わるのではなく、アウトプットが大事なのです。まちとつながり、学んだことを活かして発信するという事です。こうしたことを実現できる学校施設にしていかなければならないと思っていますが、この考えに通ずる部分が御説明の中にあつたことも、私が感激した理由ではないかと思いました。そして、これらを実現するために必要なことが3つあると思います。1点目は、他の委員もお話しされたように、異学年や地域の住民等、多様な人々が、多様な形態で関わることのできる環境が学校の中にあることです。2点目は、学校の中はどこでも教室であり、どこにいても情報が扱え、創造的に学べるような、事のつながりがあることです。3点目は、物質的な視点となりますが、木質化による木のぬくもりを感じられる施設とすること等、実際に五感を働かせて学べるような施設であることです。これはとても重要なファクターであると思ひながら、お話を聴かせていただきました。私が勤めていた白川郷学園には、村民図

書館がありました。そこには、乳母車を押した方やお年を召した方等、多様な世代の人々がいらっしやっていました。そうすると、通常の学校ではできませんが、子どもが勉強している運動場の隅の砂場で、乳児を遊ばせるような光景が日常的にみられました。「学校は学校である」ということの私なりの答えは、全ての学校とは言いませんが、学校の中に年齢差100歳、つまり学校は、0歳の子どもから100歳のご年配の方までが、日常的に集う場であるということです。例えば、保育園や幼稚園を併設することで、そういった姿は見られるだろうし、岐阜市は全校がコミュニティ・スクールですので、芥見東小学校の取組のように、学校の中に地域の多世代の方が集まれる部屋を用意することで、日常的に地域の方が出入りする姿が見られるようになると思います。こうした環境があることによって、子どもたちが多世代の方と交わる機会は必然的に増えますので、人として感化されるというよい影響も期待できます。学校は、そうしたことができる場であると思っています。

ありがとうございました。

○佐藤事務局長

ありがとうございました。

それでは、柴橋市長、お願いいたします。

○柴橋市長

長澤先生、本日はどうもありがとうございました。

他の方のご発言と重なる部分もありますが、私なりに、3点問題意識を持ちました。

1点目は、当然予算の確保が前提となりますが、2030年代から学校教育施設の更新をしていくとした場合、市立学校は約70校ありますので、一斉に行うことは不可能です。そうしますと、学校によって建て替えるものもあれば、リノベーションするものもあるでしょう。建て替える場合は、長澤先生のお話に出てきた理念や思いを、ある意味ふんだんに、ゼロから取り入れられると思います。一方で、既存のものをリノベーションする場合は、横長の廊下に沿って、同じ面積の教室が等間隔に並んでいるという昭和40～50年代につくられた校舎で、どのように一定の面積や空間をしっかりと確保するのか、大変関心がございます。岐阜市の学校はこういったタイプの校舎が多いのですが、長澤先生がおっしゃったような、これからの教育の理想を実現していく形でリノベーションした事例はあ

るのでしょうか。

2点目は、教職員コモンズに関するものです。職員室や教職員の働き方については、従前から関心をもって見ておりますが、こうした教職員コモンズが具体的な働き方改革につながり、長時間勤務の是正になったという事例があれば、教えていただきたいと思います。

3点目ですが、学校は、地域に開かれ、多世代で来ていただける場所とするという理想の追求と、かつて池田小学校で起きたような事件から子どもたちをどう守るか、治安をどう維持するかという相反する課題に対し、常に振り子のように揺れ動いているのだと思います。私は、学校を複合化して地域コミュニティの中心にしていくということに大きな価値があると思っていますが、多世代、あるいは地域外の方も入ってくる可能性がある場合に、一方で、安全の担保に関してどのように住民の方の理解を得ているのでしょうか。

以上3点について、長澤先生の御知見があれば、今後の参考にさせていただきたいと思いますので、伺えますでしょうか。

○佐藤事務局長

長澤先生、お願いいたします。

○株式会社教育環境研究所 長澤所長

本日、私がお話しさせていただいたのは、学校を構成する諸室や設計のプロセス、あるいは既存の施設が多い中でこれをどのようにしていくか、それに対してそれぞれ考えることが必要な、あるいは考えることのできるテーマがあること、そして、そのテーマを共有して考えていくこと等、今後の学校施設の在り方を考え出すスタートの話をしました。話の中で多くの事例を出しましたので、それが答えのように聞こえたかもしれませんが、これはスタートの話です。答えは、地域や学校によって異なります。本日御紹介した事例は、課題を皆で議論して、その学校ではこういう形になった、ということなのです。答えは一つや二つではありません。これは、先ほどお話しした、「名前のない施設」にもつながることだと思います。

市長がおっしゃった3点目のセキュリティーは、絶対的なものだと思います。朝、元気に送り出した子が、いつまで待っても帰ってこないことほど悲惨なことはありません。ただ、安全の守り方もまた個別に検討が必要です。既存施設の場合であれば、施設の状況や人の関わり方等によって対策は異なるでしょう。そこでどういう可能性があるか、という

ことを皆で議論し、その姿を求めていくということが必要だと思います。

1点目の既存施設のリノベーションについても、目標を定めたときに、その既存施設で何ができるのか、どのような答えの出し方があるのか、ということを考えていく必要があると思います。本日お話しできませんでしたが、和歌山県新宮市の例があります。ここは、4校あった小学校を2校ずつ統合して同規模の学校2校とし、片方は新築し、片方は改修することになりました。同規模の学校で、一方は新築で、もう一方は改修とすると、地域から様々な意見が出されそうなものですが、それが一切出ませんでした。その理由は、改修する学校においても新築する学校と同じ課題を持ち、ここは改善するという目標を皆で共有し、手を入れたからです。両校とも外装及び内装を木質化したことで、校内で過ごしている子どもたちにとって、環境はほとんど同じです。もちろん、空間の構造等は違いますが、木にはそういう力があるのです。木の持つ力というのは、加藤委員をはじめ、委員の皆様がおっしゃったとおりです。見た目によくなった、という喜びを用意することが学校施設計画の1つの大きな目標であり、その喜びを大きくする力が木にはあります。岐阜県には多くの木がありますので、これを使わない手はありません。岐阜市には山はないかもしれませんが、建てるものがあるところが木を使うことで、建てるものはないけれども、山や木はあるところで森林の保全が進みます。こうした仕組みをつくっていく役割が岐阜市にあるのではないかと思いますし、また豊富な資源が近隣にあるということで、地域的に非常に大きな可能性を持っていると思います。改修又は改築、どちらの場合も木の力を存分に生かし、見た目には同じ、喜びの大きい施設づくりをしていただければと思います。

また、本日は、長良小学校だけでなく、長良東小学校も見学させていただきました。長良東小学校では、木を適所に使いつつ、共有スペース全体に絵画や子どもたちの作品、メッセージを掲示する等し、学校全体の環境を整えようとしていました。その取組は、本当に感動的なものでした。そのような環境を活かし、さらに木をうまく使うことで、もっとよい学校になるのではないかと思います。個人的には、長良東小学校が改修されるのであれば、ぜひ参加してみたいと思いました。改修には、そのくらい可能性があると思っています。

その他、必要な資料等ご要望がありましたら、また事務局のほうと相談して用意させていただきます。

ありがとうございました。

○佐藤事務局長

市長、よろしいでしょうか。

○柴橋市長

はい。

○佐藤事務局長

本日は、皆様から多くの意見を頂戴し、ありがとうございました。

また、長澤様におかれましては、最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

次回の総合教育会議は、今年度の最終回として、1月30日に開催を予定しております。

それでは、これをもちまして閉会といたします。本日は、誠にありがとうございました。

(15時30分閉会)